

伝承文学教育の課題（1）
——中1の学習指導と伝承文学資料集——

筑波大学附属駒場中・高等学校

石井 正巳

伝承文学教育の課題（１）

— 中１の学習指導と伝承文学資料集 —

筑波大学附属駒場中・高等学校 石井 正己

（１）はじめに

本校国語科では1987年度より「中高6ケ年を見通した現代国語の教材編成—説明的文章・論説・評論—」のテーマでプロジェクト研究を行い、現在は具体的な教材編成案を作成しつつある。そうした流れの中で本年度（1988年度）は、本校42期の中1生徒（3クラス121名）を対象にした週1時間の授業のテーマとして「文化論」を設定してみた。「文化論」というテーマで1年間の授業を一貫させる方法として、1学期を「文化の発生」、2学期を「文化の伝承」、3学期を「文化の現在」という展開を考えた。その結果、現在使用している『中学校国語一』（学校図書、1988年）の教科書の教材を編成し直すことが必要になった。具体的には、1学期に「文化の発生」を考えるためには、井尻正二「マンモスの狩人」と加藤一朗「インディアンの手紙」（これらは教科書では「文化の芽生え」という単元の中に入っている）を教材に選定した。2学期には「文化の伝承」を考えるために、松谷みよ子「生きている民話」（教科書では「平和を求めて」という単元の中に入っている）を教材に選定した。ほかに「歌の言葉」として「日本のうた」が収録されているので、これを参考資料に考えた。3学期には「文化の現在」を考えるために、「写真を読む」「テレビを見る」「漫画を考える」（これらは教科書では「映像文化を考える」という単元の中に入っている）を教材に選定した。そうした構想の中で、2学期の教材として松谷みよ子「生きている民話」を扱う前に（あるいは同時に）、広く伝承文学を考えることにした。しかも、ここでいう伝承文学とは書物になった昔話集や民謡集などではなく、生徒たちがこれまでの人生の中で蓄積してきたものに限定していった。生徒たちが知っている話や歌や遊び言葉などの伝承文学を集めるために、最も簡便な方法であるアンケート調査を行った。本稿は、その調査をもとに展開した授業を簡単な実践報告にまとめ、生徒たちから提出されたものを伝承文学資料集として編集し、授業終了後のアンケート調査を整理したものである。

（２）伝承文学の教科書教材（中学校と高等学校の現状）

初等教育である小学校の教科書において伝承文学がどのように取り扱われているかも重要な問題であるが、ここでは本校の実情にあわせて、中学校と高等学校の教科書で伝承文学がどのように扱われているかを概観しておきたい。

現在中学校では、国語の教科書が5社から5系統で出されているが、その中で伝承文学を掲載しているものは意外に少なく、2社がともに中1の教科書に収録しているだけである。一つは前述した『中学校国語一』（学校図書、1988年）で、松谷みよ子「生きている民話」と「日本のうた」を掲載している。「日本のうた」には「童歌－あんたがたどこさ」「子守歌－坊やはよい子だ」「民謡－ひえつき節」「唱歌－荒城の月」「童謡－七つの子」「歌謡曲－上を向いて歩こう」を収録している。もう一つは『現代の国語1』（三省堂、1988年）で、松永伍一「童歌の心と生命力」と「童歌のいろいろ」「地域文化を受け継ごう」を掲載している。「童歌のいろいろ」には「数え歌」3編、「しり取り歌」2編を、「地域文化を受け継ごう」には芳賀日出男「花祭り」と岡山県昔話「大きい比べ」をそれぞれ収録している。

現在高等学校では、国語Ⅰの教科書が13社から22点で、国語Ⅱの教科書が13社から19点でそれぞれ出されているが、伝承文学を掲載しているものは皆無に近い。非常にまれなものが『高等学校国語Ⅱ－改訂版』（三省堂、1988年）で、「伝承のいぶき」の単元名の中に「神々の活躍（出雲国風土記・播磨国風土記）」「遠野の伝承（遠野物語）」「能登殿の最期（平家物語）」「アイヌの神謡」「オモロと琉歌」を掲載している。伝承をベースに成立した古典文学と東北・北海道・沖縄の各地方に残された伝承文学との境界を外し、文学を伝承の視点から読み取ろうとする発想に支えられた教材編成であると考えられる。「遠野の伝承（遠野物語）」には「三人の女神」「山人の男女」「サムの婆」「ヤマハハの昔話」を、「アイヌの神謡」には「かえるが自らを歌った謡」と更科源蔵「ことば遊び」を、「オモロと琉歌」では「オモロ」3編、「琉歌」4編と外間守善・仲程昌徳「恩納なべ」をそれぞれ収録している。いわゆる国語Ⅱの教科書なので、一般的には高等学校2年で扱われるとするなら、伝承文学はその時期の生徒に対する教材としても十分に耐え得るという判断にもとづいた教材編成であるといえようか。伝承文学は改めて考えてみると意外にむずかしく、その教育は決して小学校・中学校段階で終わることのできるものではないことをよく示していよう。

（3）伝承文学のアンケート調査とそれにもとづく授業

教科書の中にも伝承文学を取り扱った教材がないわけではないことはすでに見たとおりであるが、それらは大前提として文字化されたテキストとして生徒の前に提出される。それは国語科の授業だからいたしかたないのかもしれないが、伝承文学は声としての言葉のみならず音楽や動作をも含めた総体としてあるわけだから、文字化されたテキストが伝承文学そのものでないことは述べるまでもない。そうした状況の中で最も豊かに展開できる伝承文学の教材は、生徒たち自身の中に蓄積されてきたそれらであるにちがいない。

これまでの伝承文学研究は、地方の農村を中心とした村々に出掛け、お年寄りから聞き取った聞書をもとに資料集を作成し、その上に理論が組み立てられてきた。しかし、近代化の進行とともに農村の過疎化が急激に進み、伝承文学は受け継ぐ者を持たないままに数多く消えていった。

そうした中で、近年、都市の伝承文学にも視点が拡大され、現代に生きる伝承文学に関心が集まってきて、その非常に重要な担い手が子供たちであることが次第に明らかにされてきた。そうした報告から考えてみると、おそらく本校の生徒たちもなんらかの伝承文学を持ち伝えているのではないかということが予想された。

そこで、2学期になって9月5日、12日、19日、10月3日、17日に5回のアンケート調査を行った。B6の大きさの紙を配付して自由に書かせたが、なかなか思い浮かばない生徒もあったので、第1回は早口言葉、第2回はこわい話、第3回はなぞなぞ、第4回はしり取り歌・悪口言葉がないかどうかを尋ねた。ただし、それに限定したわけではなく、その時に思いついたものならば何でもよいとした。後で不明な点などの確認ができるように氏名を書くことを義務づけたが、資料などに使う時には氏名は出さないことを約束した。時間は5～10分程度をかけた。

そのアンケート調査をもとに資料を作成し、クラスによって扱った内容に若干の違いはあるが、次のような授業を5回行った。時間は20分から40分程度であった。

第1回授業（9月12日） 早口言葉とさかさ語りについて

- ・早口言葉・さかさ語りの伝承の比較
- ・早口言葉の表現の特色について
- ・さかさ語りの表現の特色とその歴史的展開について

＊資料は伝承文学資料集の早口言葉編とさかさ語り編を参照。

第2回授業（9月19日） 「おまえだ」で終わる話について

- ・「おまえだ」で終わる話の伝承の比較
- ・話型（世間話「こんな晩」）について
- ・夏目漱石『夢十夜』の第三夜について

＊資料は伝承文学資料集の「おまえだ」で終わる話編を参照。

第3回授業（9月26日） なぞなぞについて

- ・なぞなぞの特色や歴史について
- ・なぞなぞと数学などの問題・クイズとの違いについて
- ・三段式のなぞなぞと掛詞について

＊資料は伝承文学資料集のなぞなぞ編を参照。

第4回授業（10月3日） 言葉遊びについて（簡単に）

- ・言葉遊びの伝承の比較
- ・言葉遊びの表現の特色について
- ・言葉遊びのおもしろさについて

＊資料は伝承文学資料集のくさり歌編・悪口言葉編・その他編などを参照。

第5回授業（10月17日） 回文について

- ・回文の伝承の比較

- ・回文の歴史について
- ・和歌の表現のおもしろさ（折り句・沓冠）について

*資料は伝承文学文学資料集の回文編を参照。

（４）伝承文学資料集

この資料集は前述したアンケート調査をもとに編集したものである。なお、生徒氏名（住居）は次のとおりである。

A組	荒磯敏文（横浜市）	栗澤方智（杉並区）	五百城幹英（世田谷区）
	石井雄樹（渋谷区）	井上貴博（練馬区）	浮貝泰介（杉並区）
	宇野雅哉（豊島区）	大山 新（中央区）	加藤智規（横浜市）
	金子英介（練馬区）	金子宗徳（武蔵野市）	鬼頭 聡（町田市）
	君野 匠（練馬区）	木村友彦（中野区）	櫛笥隆亮（文京区）
	桑山純一（品川区）	坂本宗聡（品川区）	佐々木淳（調布市）
	清水篤志（板橋区）	白鳥秀樹（新宿区）	鈴木成教（世田谷区）
	住田安清（練馬区）	瀬崎隆行（武蔵野市）	田淵基裕（世田谷区）
	土屋 聡（板橋区）	直江隆太（中央区）	長坂正範（世田谷区）
	仁井田将人（品川区）	根本 浩（府中市）	野田修平（武蔵野市）
	廣岡延隆（世田谷区）	藤沼 賢（川崎市）	古井章公（豊島区）
	堀 洋樹（杉並区）	本田孝之（小金井市）	松坂直己（大田区）
	松本吉雄（中野区）	森脇 摂（川崎市）	山根直樹（川崎市）
	和田俊憲（川崎市）	渡辺 亮（板橋区）	
B組	青木 哲（町田市）	石山哲郎（文京区）	井上尊生（川崎市）
	上野友之（練馬区）	大平元信（練馬区）	尾郷 遵（杉並区）
	小澤一嘉（大田区）	押田雅希（杉並区）	笠間三生（杉並区）
	金子慎一郎（渋谷区）	神長英輔（豊島区）	近藤大雅（横浜市）
	佐々木吉彦（杉並区）	塩野将平（板橋区）	静永 誠（板橋区）
	須田 彰（新宿区）	園田 庸（川崎市）	多賀望洋（世田谷区）
	高橋 徹（北区）	高山征治（町田市）	侘美成彦（文京区）
	田中和孝（多摩市）	中島康明（国立市）	林寛太郎（新宿区）
	百武伸英（中野区）	平野淳一（川崎市）	不破太郎（世田谷区）
	星谷直哉（千代田区）	本田貴久（横浜市）	丸谷武央（川崎市）
	溝口秀勝（目黒区）	宮尾祐介（町田市）	宮本貴章（町田市）
	村崎哲也（川崎市）	村松和人（杉並区）	森 雷太（世田谷区）
	薬師寺涼（小平市）	安井健太郎（国分寺市）	山田浩之（世田谷区）

吉野太己（中野区）

C組	秋葉晴樹（杉並区）	浅見彰宏（世田谷区）	足立秀一郎（中野区）
	栗澤元晴（杉並区）	池野昌礼（練馬区）	石川 稔（横浜市）
	伊藤秀之（世田谷区）	井上孝治（文京区）	岩谷賢伸（川崎市）
	浦上哲朗（川崎市）	大泉保憲（板橋区）	大江耕治（世田谷区）
	大澤竜一（多摩市）	金子鋼一（保谷市）	河野淳一（世田谷区）
	北風大輔（杉並区）	北川知伸（三鷹市）	倉科徹郎（文京区）
	笹沼貴成（武蔵野市）	定近直之（横浜市）	清水昭宏（目黒区）
	白波瀬道英（世田谷区）	菅沼利晃（世田谷区）	杉原誠人（小金井市）
	鈴木洋之（三鷹市）	高橋正興（品川区）	宅間信介（世田谷区）
	田崎豪太郎（中野区）	田中将太（世田谷区）	飛岡正人（板橋区）
	日比慎一郎（世田谷区）	渕 圭吾（国分寺市）	堀 潤之（横浜市）
	柳沢建太郎（川崎市）	山崎良太（横浜市）	山田竜彦（北区）
	吉原一孝（中野区）	米津大志（世田谷区）	和田剛明（世田谷区）
	渡辺裕史（新宿区）		

また、編集の際に次のようなことを行っている。

- (1) アンケートに書かれたすべての伝承を掲載したわけではない。ほぼ8～9割程度は掲載している。編集の際に内容によって各編に分類した。
- (2) 掲載する際には書かれたものをそのまま載せた。ただし、氏名は一切書いていない。部分的に明らかな誤りがあっても訂正はしていないが、表記を改めたところはある。
- (3) 伝承の中にはいわゆる差別語を含んだ表現や性的な語を含んだ表現もあったが、生徒の伝承を尊重して手を加えていない。授業で扱った際にはその点について注意を喚起した。
- (4) 伝承事情が明確な場合や伝承事情が必要と思われる場合などには、できる限りその事情を（ ）内に注記した。「不明」とあったものや伝承事情のなかったものについては原則として注記していない。
- (5) 各編の末尾にその編について研究するための参考文献を示しておいた。主要なものだけであるので、すべてを網羅しているわけではない。ここで扱った伝承文学全般に関わるものは次の通りである。

鈴木棠三『ことば遊び』（中公新書、1975年）

鈴木棠三『新版ことば遊び辞典』（東京堂出版、1981年）

松谷みよ子『民話の世界』（講談社現代新書、1974年）

宮田登『都市民俗論の課題』（未来社、1982年）

宮田登『現代民俗論の課題』（未来社、1986年）

A) 早口言葉編

- 1 赤巻き紙青巻き紙黄巻き紙 (家族・祖母・幼稚園・小学校・小学校早口言葉大会・本)
- 2 赤パジャマ青パジャマ黄パジャマ (小学校早口言葉大会・テレビ)
- 3 うらにわにはにわにはにわにわとりがいる (家族)
- 4 庭には二羽にわとりがいる (幼稚園・小学校の友達・小学校の遠足・本・テレビ)
- 5 隣の庭には二羽にわとりがいる
- 6 かえるびょこびょこみびょこびょこ、あわせてびょこびょこむびょこびょこ (家族・幼稚園・小学校の友達・小学校早口言葉大会・テレビ)
- 7 貴社の記者が車で帰社した (小学校の国語の授業・小学校の友達・小学校早口言葉大会・本)
- 8 社長さん車掌さん所長さん (小学校の友達)
- 9 影が崖で怪我して外科で怪我を治した (本)
- 10 角のかん物屋のかち栗かたくてかめない (本)
- 11 ゴルパチョフ書記長の子、子ゴルパチョフ書記長 (ラジオ)
- 12 マグマ大使の子、子マグマ大使 (小学校の友達)
- 13 メルセデスベンツのめい、めいメルセデスベンツ (本)
- 14 織田信長のおば、おば織田信長 (小学校の友達)
- 15 織田信長のおばのばば、ばばおば織田信長 (小学校の友達)
- 16 ロボコップのボロ、ボロロボコップ (小学校の友達・昨年学校でだれかが作った)
- 17 親拒食症、子拒食症 (本)
- 18 おじあわび、おばあわび
- 19 しわくちやシャツ百着
- 20 きゃしゃ茶づけ (数か月前にクラスの**くんが作った)
- 21 ニュースを入手する (本)
- 22 シャア少佐、シャア少佐…… (小学校の友達)
- 23 走者俊足佐藤 (小学校の友達)
- 24 少女処女喪失 (家)
- 25 スモモもモモもモモのうち (姉・母や祖母・家族・小学校の友達・小学校の遠足・テレビ・ラジオ)
- 26 モモもスモモもモモのうち (家族)
- 27 スモモもモモもモモのうち、モモもスモモもモモのうち (幼稚園・小学校早口言葉大会・本)
- 28 スモモもモモもモモモモ (姉)
- 29 スモモもモモもモモモモモがたくさん
- 30 すもももももももももももいろいろ。(小学校早口言葉大会)
- 31 この釘引き抜きにくい釘 (本)
- 32 瓜売りが、瓜売りに来て、瓜売り残し、瓜売り帰る、瓜売りの声 (小学校の友達)

- 33 瓜売りが、瓜売りに来て、瓜売れないので、瓜売り帰る、瓜売りの声（本）
- 34 瓜売りが、瓜売りに来て、瓜売れず、瓜売り帰る、瓜売りの声
- 35 うたうたいがうたうたえとうたったけど、うたうたいのうた、うたうたいのように、うたえやしない（小2の頃、本）
- 36 ソーダ村の村長さんが、ソーダ飲んで、死んだそうだと、葬式まんじゅうでっかいそうだと（幼稚園の先生）
- 37 ソーダ村の村長さんが、葬式まんじゅう食って死んだそうだと、うれしいそうだと（小学校）
- 38 東京特許許可局（姉・妹・母・幼稚園・小学校の友達・中学校の友達・本・ラジオ・テレビ）
- 39 東京特許許可局局長（小学校の先生・小学校の友達・小学校の教科書）
- 40 東京特許許可局局区内（本）
- 41 東京特許局特許許可局（本）
- 42 東京特許許可局許可局長強化局長助教授（小学校）
- 43 どじょうにょろにょろみにょろにょろ、あわせてにょろにょろむにょろにょろ（本）
- 44 隣の客はよく柿食う客だ（母・祖母・家族・幼稚園・小学校の友達・小学校の遠足・本・テレビ）
- 45 隣の客はよく柿を食う客だ（親戚のおば）
- 46 隣のガキはよく柿食うガキだ（小学校の友達）
- 47 隣の客はよくガキ食う客だ（小学校）
- 48 隣のカキはよく客食うかきだ（本）
- 49 隣の竹やぶに竹たてかけた（小学校の友達）
- 50 隣の竹がきに竹たてかけた（小学校の友達・本）
- 51 隣の竹がきにだれが竹たてかけた
- 52 隣のたてがきに竹たてかけた
- 53 隣の竹がきに、竹たてかけたのは、竹たてかけたかったからだ
- 54 隣の竹やぶに竹たてかけるのは竹たてかけておきたいからで、竹たてかけたくないのなら竹たてかけたところでやめて、わたしは竹たてかけておこうと思ったら、たてかける竹がかけていた
- 55 この竹がきにだれ竹たてかけたか（小学校の遠足）
- 56 向こうの竹やぶに竹たてかけた（家族）
- 57 生麦生米生卵（姉・母・祖母・幼稚園・小学校の友達・テレビ）
- 58 なまごみなまごめなまたまご（小学校の友達）
- 59 なまむみなまめなまたまも（小学校・本）
- 60 子子の子子子子、子子の子子子子（小学校の担任）
- 61 母はははと笑った（小3の頃、教科書）
- 62 母ははははと笑った（本）

- 63はははははははははははははははははと笑った
- 64バスガス爆発（母や祖母・小学校の友達・小学校の遠足・本・ラジオ）
- 65ブスのバスガイドバスガス爆発（本）
- 66バスガス爆発バスガスバイト（本）
- 67バスガス爆発バス死亡
- 68ブスバスガイドバスガス爆発（小学校の友達）
- 69坊主が屏風に上手に坊主の絵を書いた（家族・祖母・親戚のおば・小学校の友達・小学校早口言葉大会・本・テレビ）
- 70坊主がびょうびに上手に坊主の絵をかいた（本）
- 71坊主が屏風に上手なジョーズの絵をかいた
- 72坊主が屏風に上手にジョーズの絵をかいた（本）
- 73ジョーズがジョーズにジョーズの絵をかいた（小学校の友達）
- 74坊主が上手に屏風に坊主の絵をかいた（母・小学校の友達・本）
- 75坊主が上手に屏風にジョーズの絵をかいた（テレビ）
- 76ジョーズが坊主に丈夫で上手な絵をあげた
- 77やっぴーきゃっぴーおきゃっぴー（小6の時自分で考えた）
- 78みかんのかんづめを三日前にみつつかん買ってミツカンのいれものにいれといたのに見つかんないな
- （参考文献）安間清『早物語覚え書』（甲陽書房、1964年）

B) さかさ語り編

- 1昔、昔、未来の昔、八十九のばあさんが、九十八の孫連れて、黒い白馬にまたがって、曲がりくねった直線を、前へ前へとバックした、それを見ていた男のばあさん、腰を抜かして立っていた。（小1の頃、姉）
- 2昔々のつい最近、その日は朝から夜だった、どんより曇った日本晴れ、生まれたばかりのばあさんが、海から山へと飛び込んだ、それをめくらが発見し、めくらがつんぼに電話して、つんぼが警官に電話した。一人の警官ぞろぞろと。（小2～3の頃、姉）
- 3昔々の今さっき、今日は朝から昼だった、月の惑星太陽が、かんかん照りのどしゃぶりで、七、八歳の男の婆さんが、八十五、六の孫連れて、海から崖に飛び込んだ、それをめくらが発見し、つんぼの家に電話した、つんぼは家を飛び出して、曲がり角を、前へ前へとバックした。（学校で聞いた）
- 4昔々のつい最近、その日は朝から昼だった、白昼の夜に、満月の太陽が、西から東へ沈むころ、生まれたばかりのじいさんが、九十五、六の孫連れて、谷から山へ飛び降りた、それをめくらが目撃し、それをつんぼが聞き付けて、警官一人がぞろぞろと、黒い白馬にまたがって、

前へ前へとバックした。(小6の時、予備校ではやっていた)

5昔々のつい最近、昨日生まれたばあさんが、八十六の連れて、海から陸へ飛び込んだ、それを見ていためくらが耳つんぽに電話し、耳つんぽはおまわりさんに電話した、おまわりさんは黒い白馬にまたがって、バトカーかついで、前へ前へとバックしながら、空から陸へ飛びたった。(小3～4の時、友達から)

6昔々のつい最近、生まれたばかりのじいさんが、八十五、六の孫連れて、海から陸へ飛び込んだ、それを見ていためくらがつんぽに電話して、つんぽはおまわりに電話した、黒い白馬にまたがったおまわりさんが、バトカーかついで、前へ前へとドックしながら、空から陸に飛びたった。(小3～4の時、小学校の友達から)

7昔々のつい最近、昨日生まれたばあさんが、八十六の孫連れて、海から陸へ飛び込んだ、それを見ていためくらが耳つんぽに電話して、耳つんぽはおまわりさんに電話した、おまわりさんは黒い白馬にまたがって、前へ前へとバックした。(小3の頃、友達から)

8昔々のその又さっき、さっき生まれたばあさんが、九十五、六の孫連れて、海から陸へと飛び込んだ、それを見ていためくらのじいさん、すぐにつんぽに電話した、たった一人の兵隊が、黒い白馬にまたがって、前へ前へとバックした。(小6の頃、学校で聞いた)

9昔々のつい最近、その日は朝から夜だった、からっと晴れた大雨に、遠い東の北極で、昨日生まれたばあさんが、八十五、六の孫連れて、海から崖へ飛び下りた、それをめくらが発見し、おしがつんぽに電話した、ひとりの警官ぞろぞろと、前へ前へとバックした、正義の味方の悪いやつ、腰を抜かして立っていた。(小学校の頃、友達の間で流行った)

10昔々のつい最近、その日は朝から雨だった、生まれたばかりのばあちゃんが、百十五、六の孫連れて、黒い白馬にまたがって、前へ前へとバックした。(小3の頃、早口言葉の本を読んだで知った)

(参考文献) 石井正己「てんぽ物語論」(『物語研究』1, 新時代社, 1986年)

石井正己「嘘をめぐる伝承」(『学芸国語国文学』, 1986年3月)

C) くさり歌編ー「インドの山奥で」などー

1インドの山奥でんぼううったラッキーがころがりきんだひょうしにねんの春だよしゅうをわすれてんか一品サザンサザン (小4の時、友達・小6の時、友達・小6の頃、コマーシャル)

2インドの山奥鉄っぽううったラッキーがころがりきんだひょうしにねんの春だよしゅうをわすれてんか一品サザンサザン (小4の頃、学校で)

3インドの山奥でんでんむしかたつむりりんごがまっかつかあちゃんおこりんぼうずが泣いちゃったぬぎのたっしょんべんじょがあかないヨーグルトンガラシンじまえびフラインドの大奥でんでんむしかたつむりりんごがまっかつカーラスなぜ鳴くのからすは山にんにく食べたら尻が

ぼっぼっーはとぼっぼー豆がほしいかそらやるぞーみんなで仲良く食べにこイ（初めに返る）

4インドの山奥でんぼうとどけたんぼのまんなかのじょのひみつわかつちやいるけどーにもこーにもんだい解けないちじくかじくさんまはのんきにきびをつぶしてんぶらあげたらっきょがころがりきんだひょーしにねんの春だよしゅう忘れてんか一品サザンサザン(コマーシャル)

5インドの山奥でんでんむしかたつむりんごはまつかつかあちゃんおこりんぼくがないちゃったぬきの大しょんべん所の戸があかないしょくしちゃだめよーぐるとんがらしんじまえびフライ

6インドの山奥でんでんむしかたつむりんごはまつかつかーちゃんおこりんぼくはないちゃったぬきの立ちしょんべんじょがあかないよーぐるとんがらしんじまえびフラインドの…（初めに返る）（小4の時、友達）

7インドの山奥でんでんむしかたつむりんごはまつかつかあちゃんはおこりんぼくはないちゃったぬきのきんたまでかいねこはしわだらケンタッキイ（小6の時、友達）

8インドの山奥でんでんかたつむりんごがまつかつかーちゃんおこりんぼうずが泣いちゃった

9インドの山奥でっぱのはげあたマンモス……（忘れた）……（小学校の友達）

10インドの山奥でんでんむしみつけたんぼでげぼはきんたままだしっこもらしてんぐのはげあたマント（小3の頃、友達）

11インドの山奥でんでんむしかたつむりかちゃんプレゼントマトなぜ赤インドの（初めに返る）（小3の時、友達）

12インドの山奥でんでんむしかたつむりかちゃんプレゼントマトはなぜ赤いかの丸焼きつねのおなかはなぜ白いンドの……（初めに返る）

13インドの山奥でっぱのおじさんちんげがはえたらどうしましょんべん（友達）

14ヨーグルトうがらしんじまえびフラインドの山奥でっぱのはげあたまんじゅう食いたいなか村さん家もマクロードリフの大ばくしょうべん食えたらへがぼっぼはとぼっぼ豆がほしいかでもやらない世間はそんなに甘くない（小5の時、友達）

15やだヨーグルトんがらしんじまえびフラインドの山奥でーんでん虫見つけたーんぼに落っこちーんちんぶらぶラーメン食えたいよーグルト（初めに返る）（小学校の時、友達）

16カラスなぜ鳴くのカラスは山にんくくさいぞ屁が出たポッポッポッハトポッポッ豆がほしいかそらやるゾうさんゾうさんお鼻が長いのねこふんじゃつたねこふんじゃつたねこふんじゃふんじゃふんじゃつたんたんタヌキのきんたまは風もないのにブラブラ（小さい頃、近所の子）

17カーラスなぜ鳴くのカラスは山にんくくさい食えたら屁がぼっぼっぼーハトポッポー豆がほしいかそらやるぞーさんぞーさんお鼻が長いのねこふんじゃつたねこふんじゃつたんたんタヌキのきんたまは一風にゆられてブーラブラ（小3の頃、友達）

- 18デンデンデンロク豆うまいまめだかの学校は川のなからすなぜ鳴くのからすは山にんにく食べた
たら屁が出たぞーさんぞーさんおー鼻が長いのねこふんじゃったねこふんじゃったねこふん
じゃつふんじゃふんじゃったぬきがぎんたまころがしすりむきたんこぶできちゃったこあが
れ（小学校の頃、妹）
- 19デンデンデンロクマメダカノガッコーハカワノナカーラスナゼナクノカラスハヤマニソニクタ
ベトラ尻ガポッポッポッポッポハトポッポマメガホシイカソラヤルゾウサンゾウサンオハナ
ガナガイノネエムーミンコッチムイテハズカンガラナイデ（初めに返る）
- 20カョパンツリンゴリンジュースイカ（初めに返る）（小学校の時、友達。カップ、パンツ、ツ
リ、リンゴ、ゴリンジュー、ジュース、スイカのこと）

D) 悪口言葉編

- 1バカ、あほ、ちんどん屋、おまえのかあちゃん出べそ（姉）
- 2ばか、かば、ちんどん屋、おまえのかあさん出べそ（お返しに）そういうおまえも出べそ（小
学校）
- 3おまえのかあちゃん出べそ
- 4ばか、あほ、まぬけ、おたんこなす、かぼちゃ、でっば、ぱっぱ、みそっぱ、おまえのかあ
ちゃん出べそ
- 5あんたは、ちょっと、みかけに、よらない、ゴリラの、むすこの、ななだいめ、はっきりいっ
てにっぽんいちの、くるくる、ばー（数え歌式）
- 6あんた、ちょっと、みかけに、よらず、ゴリラの、むすこの、ななばんめ、はっきりいって、
くるくる、パー（数え歌式）（小学校の時流行った）
- 7あんた、ちょっと、みかけに、よらず、にっぽんいちの、くるくる、ばー（姉）
- 8ぼーけ、なーす、かーぼちゃ（幼稚園）
- 9四角三角丸、丸はお月さま、お月さまは0点、0点は君の点数（小学校の友達）
- 10ぶったら豚によく似てる、三年前から豚だった
- 11けったら毛虫によく似てる、十年前から毛虫だった
- 12やめて、よして、さわらないで、あかがつくから、あんたなんかきらいよ、顔も見たくない、
ブン（小2の頃、学校で）
- 13チョキ出して、パー出して、鼻をつまんでくさいくさい（からかいの言葉）
- 14おまえのとうちゃん、ハゲッパ、スリッパ、ヨーロッパ（姉）（ハゲッパは頭がはげていること）
- 15でぶでぶ百貫でぶ、車にひかれてぺっちゃんこ、ぺっちゃんこはおもち、おもち白い、白
いはウサギ、ウサギははねる、はねるはカエル、カエルは緑、緑ははっぱ、はっぱはゆれる、
ゆれるは幽霊、……（忘れた）……電球は光る、光るはおじんのはげ頭（姉）
- 16でぶでぶ百貫でぶ、車にひかれてぺっちゃんこ、ぺっちゃんこはせんべい、せんべいは甘い、

甘いは砂糖、砂糖は白い、白いはウサギ、ウサギははねる、はねるはカエル、カエルは緑、緑はキュウリ、キュウリは長い、長い列車、列車は光る、光るはおやじのはげ頭（小2の時、友達）

17でぶでぶ百貫でぶ、車にひかれてぺっちゃんこ、ぺっちゃんこはせんべい、せんべいは丸い、丸いは月、月は光る、光るはおやじのはげ頭（小1の頃、友達）

18でぶでぶ百貫でぶ、車にひかれてぺっちゃんこ、ぺっちゃんこはお皿、お皿は薄い、薄いせんべい、せんべいは甘い、甘い砂糖、砂糖は白い、白いウサギ、ウサギははねる、はねるはカエル、カエルは緑、緑はカップ、カップは怖い、怖い幽霊、幽霊は消える、消えるは電気、電気は光る、光るはおまえのはげ頭

19でぶでぶ百貫でぶ、車にひかれてぺっちゃんこ、ぺっちゃんこはせんべい、せんべいは丸い、丸いはボール、ボールははねる、はねるはカエル、カエルは緑、緑はキュウリ、キュウリは長い、長い煙突、煙突は黒い、黒いは悪魔、悪魔は消える、消えるは電気、電気はおやじのはげ頭、ピカー（小学校の友達）

20さよなら三角、またきて四角、四角は豆腐、豆腐は白い、白いウサギ、ウサギははねる、はねるはノミ、ノミは赤い、赤いはリンゴ、リンゴは高い、高い富士山、富士山はこわい、こわいは幽霊、幽霊は消える、消えるは電気、電気は光る、光るはおやじのはげ頭（小学校低学年の時、父）

21さよなら三角、またきて四角、四角は豆腐、豆腐は白い、白いウサギ、ウサギははねる、はねるはカエル、カエルは青い、青いはバナナ、バナナは長い、長い煙突、煙突は黒い、黒いはこわい、こわいはおばけ、おばけは消える、消えるは電気、電気は光る、光るは***のはげ頭（小学校の時、友達）

22丸三角四角、四角は豆腐、豆腐は白い、白いウサギ、ウサギははねる、はねるはノミ、ノミは赤い、赤いはホオズキ、ホオズキは鳴る、鳴るはおなら、おならは臭い、臭いは便所、便所は深い、深い海、海は青い、青いは空、空は広い、広い屋根、屋根は滑る、滑るは父ちゃんのはげ頭（小2の時、友達）

E) ジャンケン言葉編

1焼きいも焼きいもおなかグー、ほかほかほかほかあちちのチー、食べたならなんにもなくなるパー、それ焼きいもまとめてグーチョコキパー（幼稚園の時習った）

2ジャンケンほかほか北海道、あいこでアメリカヨーロッパ（母）

3最初はグー、ジャンケンポン

4最初はグー、またまたグー、いかりやチョウ助、頭がパー、正義は勝つ、ジャンケンポン（テレビ）

5せっせっせのよいよいよい、お寺のおしょうさんが、カボチャの種をまきました、芽が出てふ

- くらんで、花が咲いて、ジャンケンポン
- 6ジャンケン、ポックリ勝った馬のけつ、鼻血ブー（あいこの場合は鼻血ブーを繰り返す）（小学校の頃、みんなで）
- 7ジャンケンぽっくりがたまのくそ、鼻くそ丸めて梅仁丹

F) なぞなぞ編

[二段式のなぞなぞ]

- | | |
|----------------------------|------------------|
| 1母には二度あえど、父には一度もあわず | 唇（小学校の担任） |
| 2もちはもちでもたべられないもちは？ | 尻もち・やきもち（小学校の友達） |
| 3すいかの両側は | 月・木（小学校） |
| 4きってもきってもきれない紙は？ | トランプ（小学校の友達） |
| 5きってもきってもきれないもの | トランプ（姉・小学校の遠足） |
| 6世界のほとんどの所にあるのに、四つしかないものは？ | 東西南北（小学校の友達） |
| 7日本中どこにでもあるのに、四つしかないもの | 東西南北（小学校） |
| 8町の中で赤い顔して口を開けているのは？ | 郵便ポスト（小学校の友達） |
| 9上は工場、下はごみばこ | 鉛筆削り |
| 10上は洪水、下は火事 | 風呂（小学校の遠足） |
| 11下は大火事、上は大水 | 風呂（小学校の遠足） |
| 12上は大水、下は大火事 | 風呂（姉、本） |
| 13下が火事で、上が海 | 風呂（本） |
| 14下は大火事、上は洪水 | 風呂（小学校の友達） |
| 15足から入り、頭から出るもの | 風呂 |
| 16入る時に上にあり、入った時に下にあるもの | 五右衛門風呂のふた・襟（祖母） |
| 17駅の中にあるもの | 岡 |
| 18世界のド真ん中と言えは？ | か（ひらめいた） |
| 19皿にイチジクを入れると花が咲く、何の花だ | 桜（小5の時、先生） |
| 20タコが入ればすると何になるか | タバコ（小学校） |
| 21山々の間に風ぞ吹く | 嵐山（本） |
| 22栗の木が嵐で倒れ、響きあるのに音はなし | 西郷 |
| 23立派立派と言われていつも、ふみつけられているもの | スリッパ |
| 24パンはパンでもたべられないパン | フライパン・ジーパン |
| 25夏は厚着して、冬は何も着ないもの | 木 |
| 26初めは四本足、次は二本足、最後に三本足になるもの | 人間（小学校の友達・本） |
| 27目が三つ、足が一本、手は0本 | 信号（テレビ） |

28足が一本、目が三つ		信号
29歯が二本、目が三つ		下駄 (本)
30緑と黒のしまの顔、ナイフで突いたら赤い血が出る	すいか (テレビ)	
31茶の間で使い、押し入れの中に入っているもの	座布団 (小学校の友達)	
32見ているときは見ていなく、見ていない時に見るもの	夢	
33行きは単線、帰りは複線	チャック (本)	
34ラッシュ電車の中にいる鳥	コンドル (本)	
35遠くにあるけど、近くにある食べ物	蕎麦	
36一と四の間にあるもの	兄さん (本)	
37幽霊の出る墓地の裏の店は？	飯屋	
[三段式のなぞなぞ (……とかけて……ととく、その心は……)]		
38東京ドーム	君の成績	カワラ (瓦・変わら) ない (本)
39こたつ	飛行機	コード (cord・高度) がなくてはいけない (本)
40暗い道	腐った卵	キミ (気味・黄味) が悪い (本)
41腐った卵	暗い夜	キミ (気味・黄味) が悪い (塾の先生)
42西洋料理	津軽海峡	ハン (箸・橋) を使わない (テレビ)
43腐った弁当	月の表面	クウキ (食う気・空気) がない (本・テレビ)
44卵	御所車	キミ (黄味・君) がおわす
45しぶといセールスマン	卵を温めないニワトリ	なかなかカエラ (帰ら・孵ら) ない (本)
46にぼし	祭り	ダン (出汁・出車) (本)
47スケート	幾何	コオリ (氷・公理) の上に立つ (本)
48ラジオ	秋の花	キク (聴く・菊) (本)
49サラ金	アイスクャンディ	コオリガシ (氷菓子・高利貸し)
50曲がった木	マラソンランナー	はしら (柱・走ら) にゃならない (テレビ)
51信号機	トマト	青から赤にかわる (本)

(参考文献) 柳田國男『なぞとことわざ』(講談社学術文庫, 1981年)

鈴木棠三『なぞの研究』(講談社学術文庫, 1981年)

鈴木棠三『日本のなぞなぞ』(岩波ジュニア新書, 1986年)

G) 回文編

- 1新聞紙 (テレビ)
- 2新聞紙とトマトと新聞紙 (友達・本)
- 3竹やぶ焼けた (友達・本)
- 4このみくんさんねんさんくみのこ

- 5私負けましたわ（友達・中学校で**くんから・本）
- 6ダンスが済んだ（本）
- 7ママが私にしたわがまま（塾の壁に書いてあった・地面に書いてあった）
- 8関係ない喧嘩（小学校の友達）
- 9とまと（母・小学校の友達）
- 10やおや（小学校の友達）
- 11留守をする（母）
- 12留守にする
- 13きつつき（本）
- 14たけむらたけこことらむけた（小学校の上級生）
- 15たいやき焼いた（小学校の友達・本）
- 16タイヤを焼いた（小学校の友達・本・自分で考えた）
- 17ぞうくんぱんくうぞ（本）
- 18るすにかばをばかにする（本）
- 19パパだ禁煙延期だパパ（ガムの紙にあった）
- 20イカ食べたかい
- 21今朝食べた鮭（自分で考えた）
- 22確かに貸した
- 23ぞくきそきくぞ（本）
- 24またあげは明治のじいめはげあたま
- 25夜いるよ（本）
- 26今うまい
- 27この木はきのこ（自分で考えた）
- 28かたきが来たか
- 29ミルクとくるみ
- 30すいとうといす（小学校）
- 31にわとりとわに（小学校）
- 32小猫猫
- 33この子猫の子（本）
- 34この子猫子猫の子
- 35軽いきびんな子猫何びきいるか（本）
- 36なんてしつけいい子いいけつしてんな（小学校）
- 37この子どこの子（小学校の友達・本）
- 38だんなだんななんだなんだ（テレビ）

39わたしがしたわ（自分で作った）

40肉の多い大乃国（母・自分で考えた）

41んどうしようよしうどん（ガムの紙にかいてあった）

42猪苗代湖に殺しは無い（小学校の友達）

H)「おまえだ」で終わる話編

1ある山のふもとに、おばあさんとその孫が住んでいた。ある日、その家に一人の青年が山の案内をしてくれと頼んだ。そして、おばあさんが留守だったので、孫が道案内をしたのだが、途中で二人は喧嘩をしてしまい、青年は孫を殺してしまった。そして、青年はそのまま逃げた。しかし、青年はそのことで頭がいっぱいで、夜も眠れなかった。そして、次の日、またその山に行ってみた。すると、警察などで人がいっぱいだった。青年はおばあさんに「どうかしたんですか」と聞くと、「孫が殺されたんです」と答えた。青年は自分が殺した人のことだと思い、「それで犯人は見つかったんですか」と聞いてみた。すると、おばあさんは「ええ犯人はわかっています」と言った。青年は「だれですか？」と聞くと、おばあさんは答えました。「犯人はおまえだ」。（小4の時、学校の先生）

2昔、ある男が酒場でとなりの男と口論になって、表でけんかをして殺してしまった。その時のけんかで、肩に傷あとを残した。何年か後に、その男は旅に出た。日が暮れてきたので、宿に泊り、旅の疲れをいやすために、あんま（男）を呼び、上半身裸になり横になった。男はあんまに「おもしろい話はないか」と聞いてみると、あんまは話し出した。「いや、よく知った男の話なんですがね、そいつが酒を飲みながら愚痴をこぼしていると、となりの席に注意したら口論になって殺されちゃったが、無念のあまりあんまの幽霊になって自分を殺した男をさがしているということです」。男は自分のこととわかったが、ばれないようにしらばっくれて、「で、見つかったのかね」と尋ねた。あんまは「ええ、見つけましたよ。そいつはおまえだ」。（小学校の先生）

3男の子が学校に大事な宿題を忘れたので、夜に取りにいきました。すると、校門にまりをもった小さい女の子がいました。その男の子が何を言っても、女の子は何も言いません。男の子は「ぼくの言うことに『はい』ならまりを一回ついて、『いいえ』ならまりを二回ついて」と言いました。「おかあさんはいないの」。少女はまりを一回つきました。「死んだの」。また一回。「殺されたの」。また一回。「だれに殺されたの」。「おまえだ」（と言っておどかす）。
（小4の時、親戚の子）

4時は大正時代、ある親が駅の前に生まれたばかりの赤子を捨てた。借金で生活できなくなったからだ。それから数年たち、その親はその駅に用があって行った。すると、プラットフォームで、小さい女の子が泣いている。その親は不思議に思って聞いてみた。「捨てられたの？」。女の子は泣いているばかりだ。「父親だれ？」。女の子は泣いているばかりだ。「母親だれ

？」すると、その女の子は突然顔を上げた。「おまえだ」。…（小5の時、学校で）

5女の人が少女をバラバラにして殺し、コイン・ロッカーに入れておいた。そして、半年後、その夫が死んだ。そして、それから、半年後、同じ所に一人の女の子が立っていた。その女の人は女の子に「おとうさんは？」。すると、女の子は「いない」と答えた。女の人は「おかあさんは？」と聞いた。すると、女の子は「おまえだ」。（小3の時）

（参考文献）野村純一「世間話と「こんな晩」」（『昔話伝承の研究』，同朋舎，1984年）

I) こわくておもしろい話編

- 1悪の十字架。山の中に店があった。そこに一人の男が近寄り、聞いた。「開くの十時か？」。
（小3～4の時、姉）
- 2悪の十字架。ある男が山を下りて来た。日が昇り始め、その男はある町に来た。そしてある店の前に立った。「開くの十時か」。（小5の時、学校の友達）
- 3悪の十字架。ある日ある人が呪われた館に行ったが、門が開いていなかった。とびらには何か書いてあった。その人はそれを読んでつぶやいた。「開くの十時か」。（小学校）
- 4悪の十字架。ある所に呪われた男がいた。その男が教会に祈りに行こうとして門まで行くと、門に何か書いてある。男は読み終わってこう言った。「開くの十時か」。（小学校）
- 5悪魔の人形。とある場所のおもちゃ屋の前をある女の子が通りかかった時、その子は言った。
「あっ、熊の人形だ！」。（小3の時、兄）
- 6悪魔の人形。あるところに呪われた子供がいた。その子はある日デパートに行った。そしてこうさげんだ。「あ、熊の人形」。（小学校）
- 7悪魔の人形。一人の少女が暗い山奥の中、親とはぐれてさまよっていた。しばらく行くと、川の向こうに小さな灯りが見えた。少女はその灯りの方に近づいて行った。その灯りとは、小さな店の灯りだったのだ。少女はそのお店の中に入り込むと、突然大きな悲鳴を上げた。
「あ、熊の人形」。（小学校の友達）
- 8悪魔の人間。ある少年が友達の家へ遊びに言った。すると熊の人間が飾ってあるので、少年は言った。「あ、クマの人間」。（小3～4の時、姉）
- 9A君とB君は山へ行った。辺りが暗くなったころ、後ろを見てA君が「あくまだ」と言ってふるえだした。B君は「悪魔なんているわけねーだろ」と言って後ろを振り向くと、熊がぎばをむきだしていた。（小学校）
- 10青い血。ある人が喫茶店に入った。そしてコーヒーをたのんだ。しばらくするとコーヒーが運ばれ、その人はそれを飲んだ。「あーおいちー」。（小5の時、学校の友達）
- 11青い血。ある山の中につるがからみ今にもつぶれそうな山小屋があった。そして、夕暮れ、一人の子供がべそをかいてその山小屋に掛け込んだ。住んでいたのは八、九十のおばあさんであった。カマドではぐつぐつ何かが煮えたち、おばあさんはほうちょうをといでいる。「こ

のシチュー、あーおいちー」。(不明)

12恐怖のみそ汁。あるところに一件の山小屋があった。そして、そこに住んでいるのは一人のおばさんと子供だった。日は暮れ、不気味に静まりかえっている。「今日、麴のみそ汁か」。

(不明)

13恐怖のみそ汁。あるひっそりとした山奥の山小屋に、小さい子と老母が住んでいた。夕暮れのころ、鍋ではぐつぐつ湯がえたぎり、老母はほうちょうをといでいる。「今日、麴のみそ汁か」。(不明)

14さらわれた学校。ある学校で、ある時、突然「ガチャーン」という音がした。その音は給食室で皿が割れた音だった。「皿割れた学校」。(小5の時、学校の友達)

15亀の呪い。亀は歩くのがのろい。「亀ののろい」。(小5の時、学校の友達)

16呪いのウサギ。ある少女が森の小道を歩いていた。すると一匹のノウサギが出てきた。そのウサギの歩き方があまりにも遅いため、その少女は言った。「のろいノウサギ」(小3～4の時、姉)

17蛙の呪い。ある日です。小学四年生の少年が寄り道をして急いで帰っていました。日は沈みかけ、空は雲でおおわれ、生ぬるい風が吹いていました。少年が歩いていると、一匹の蛙が足にまとわりついて来ます。蛙の目の赤い光が輝いています。少年は恐ろしくなり、蛙を踏みつぶしました。「グェッ」という声とともに、蛙はつぶれました。しかし、頭はつぶれていなくて、うらめしそうな目でにらんでいます。いきなり雨が降り、稲妻が光りだしました。少年はこわくなり、走りだしました。そして、家へ帰り戸を開けると、母が青い恐ろしい顔をして立っています。そして、小さい声で、「帰るののろい。心配したのよ」と言いました。(小5の時、現在の*組の**くん)

18呪いのおばあさん。あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。ある日二人で散歩に出ました。おばあさんは足が悪く、おじいさんがさっさと行って後ろを向き、一言、「のろいー、おばあさん」。(小6の時、学校の友達)

19猫の話。猫が口を開けた。歯が無かった。「猫の歯無し」。(小5の時、学校の友達)

20手のない話。「たちつ*と」(バスガイド)

21青山墓地で白い着物を乗せたタクシーは、「ギャー」という声を聞いて後ろを見てみると、女がいない。その時女の声がした。「まだ乗っていないわよ」。(本)

22青山墓地で白い着物を着た女を乗せたタクシーは、急なカーブを曲がった。ふと後ろを見ると、女がいない。「あっ、ドアが開けっぱなしだった。どうやら、さっきのカーブで落としてしまったらしい……」。(本)

23ある日、タクシーの運転手に、一人の女が「乗せてください」と言ってきた。運転手は女の人を乗せてしばらく走った後、止まって後ろを見た。すると、女の方は消えて、座っていたところがぬれていた。周りを見ると、その女の方は小便をたらしながら走って行ってしまった。

(本)

24あるタクシーの運転手が雨の降る日に、ある年を取ったおばあさんを乗せて山道を走っていた。

あまりにも静かなので、バックミラーを見ると、おばあさんの姿がない。ぎょっとしてシートを見ると、おばあさんはシートから落ちて寝ていた。(不明)

25若い女はその日の夕飯のおかず、十個入りのシューマイを買った。家で開けてみるとシューマイは九個しかなかった。女は気味が悪いので、食べなかった。次の日に開けてみると、シューマイは七個しかなく、次の日には三個しかなかった。「きゃー」。箱をひっくりかえしてしまった。そして、女が見たものは、箱のふたの方にひっついて七個のシューマイだった。(本)

26ある日、ある若い夫婦が十個入りのシューマイを買った。晩に食べようすると、九個に減っていた。気味が悪くなり、その日は食べなかった。次の日は八個、その次の日は七個、また次の日は三個になっていた。「きゃー」。若い夫婦が見たものは……ふたの裏に付いた七つのシューマイだった。(本)

27ある人が山で道に迷い歩いていると、古い大きなお寺があったので、一晩の宿を借りたいと住職にたのんだ。住職は二つ返事で了解した。しかし、「古いトイレには絶対行かないでください」と言われた。翌日、その人は大がしなくなった。しかし、新しいトイレははてしなく遠かったので、しかたなく古いトイレに入った。その人がおもいっきりきばって、出したと思ったのに落ちた音がしなかった。(ボタン式) その人はこわくなって立ち上がった。パンツをはいていた。(小6の時)

(参考文献) 松谷みよ子編『現代民話考 第一期 III 偽汽車・船・自動車の笑いと怪談』(立風書房、1985年)

J) 学校に関わる話

1中野区のX小学校の話。表にある白と黄色のアパートの二階からバイオリンの音が鳴りはじめると、ほおに包丁をさした人が降りて来る？(小3の時、学校の友達)

2ある晩、Xさんが学校の前の暗い道を歩いていた。すると、不気味な人に会い、「青・赤・黄の色の中でどれがいいか」と聞かれた。Xさんは「青」と答えた。翌日Xさんは青ざめて死んでいた。次の晩、今度はYさんがXさんと同じようになり、「赤」と答えると、血を浴びて死んでいた。さらに次の晩は、Zさんが「黄」と言うと、何もなかった。(小学校の友達)

3ある夜、だれもいない理科室で、人体の骨がカタカタと動いた。(小学校の友達)

4ある学校の理科室の人骨の標本は、夜中に各教室の机を整頓するそう。

5ぼくの行っていた小学校で、図書室の絵が夜中の十二時に動くそう。しかも、だれが見たのかもわからない。

6ある夜、だれもいない音楽室で、ピアノが鳴っていた。(小学校の友達)

7雨が降っている日、学校の二十分休み（二時限と三時限の間の休み）、音楽室でピアノが鳴っているという。（小3の時）

8僕が行っていた小学校の体育館の鏡から夜八時になるとお化けが出る。（小1の時）

9僕が前いた小学校で、体育館の地下に幽霊が出るといううわさが出たことがある。わけは交通事故で死んだ生徒の使っていたカバンと机がそこにほっぽり出されているからだそうだ。

（小2の時、うわさ）

10ぼくが小学校の時、くぎが打って入ることのできないトイレがあり、「なぜ入れないのか」と友達に聞くと、「このトイレに幽霊が出るから」と聞き、うそだと思ってぼくがのぞくと、ほこりのかぶっているトイレに、点々と足あとが……（小5の時、実話）

11ある学校のトイレの鏡には、人の顔それも表面がボロボロのが出てくるそうである。それは、ある科学クラブで王水を作る実験をしているとき、何かの原因で容器が破裂し、中の王水が飛び出し、一人の女子生徒の顔にかかったそうである。その生徒をすぐ保健室に連れて行っただが、顔半分が溶けかけて、手当てができなく、救急車を呼んだ。保健の先生は用事のため部屋を出たすぎに、その生徒はトイレに行き、鏡を見てしまった。生徒はショックで死んでしまい、その力（？）が鏡にこびりついて、ときどき現れるという。（本）

12小学校のトイレで、四十九回ドアをたたいて丸を書いて「花子さん遊ぼっ」と言うと、「は・あ・い」と聞こえて来るという。そして、それを何回もやると、のろわれてしまうという。（小4の時、学校の友達）

13ある女子校の話。仲の良い二人組がいました。修学旅行の日、二人組の一人、仮にTとしましょう。Tはバスの中で気分が悪くなり、いったん引き返し、タクシーで後から追い掛けることにしました。もう一人、Kとしましょう。Kはホテルに着いても、まだTが着かないので、どうしたのかと不思議に思いましたが、夜になったので、寝ることにしました。その日の真夜中、Kは自分の名前を呼ばれているような気がして目が覚めました。同部屋のほかの人は寝ていました。「Kさん……」。自分を呼ぶ声をはっきり聞こえます。ほかの人を起こそうとしても、起きません。声はトイレから聞こえてきます。おそろおそろ、Kはトイレの戸を開けました。するとそこは、一面の海でそして……。Tの首から上だけがありました。Tはタクシーで追い掛ける途中、カーブのところで事故を起こし、崖から落ちて死にました。そして、その死体には首がなかったそうです。首は友に会いたくて、首だけが歩いて行ったのでしょうか……。

14ある少女が、ある日学校のトイレに入り、出ようとしたところ、そこら中の壁や床から青白い手がたくさん出てきて、少女は逃げ回った。そうしているうちに、気がついてみると、雑司ヶ谷墓地を走り回っていた。（数年前、友達）

15女子トイレで、「赤いちゃんちゃんこいらないかね…」という声が聞こえ、「いる」と言ったら服が血だらけになり、赤いちゃんちゃんこみたいになった。（本）

- 16ある人がトイレに入ったら、上の方から「赤いちゃんちゃんこ着せましょか」という声が聞こえてきた。するとその人は「着せてくれ」と言ったら、上からナタが落ちてきて、のどにささってしまって、血が吹き出して死んでしまった。(本)
- 17ぼくの小学校のトイレに真夜中に入ると、「赤いマントはいらんかね」というしわがれた声があるそうだ。その声に対して「いらない」と返答した人は助かるそうだが、もし間違っても、「いる」と言ってしまうと、次の瞬間その人の首から血が流れだし、背中が赤でべっとりになるそうだ。(小4の時、学校の友達)
- 18小学校のトイレの戸が開かなくなった。そして、その中からは「赤いマントはいらんかね～」という声がするというのです。一人の男の子が「赤いマントください」と言った。次の日の朝、あたかもマントを羽織っているように、その男の子がトイレの前で血だらけになって死んでいた。(本)
- 19ある学校のトイレの一つで、入るとどこからともなく「赤いマントをかけますか」という奇妙な声が聞こえてくる。ある日、気味が悪いので、警察官を呼んできた。すると、いつものように「赤いマントをかけますか」と聞こえてきた。警察官はその質問に「はい」と答えた。すると、頭上からナイフが落ちてきて、警察官の頭に刺さった。そして、頭からはたくさんの赤い血が流れ出た。それが赤いマントだったのである。(小1～2の時、学校の友達)
- 20父の高校時代の先生の話。その先生は宿直で、トイレに行くと、その高校は木造で、廊下がギンギン鳴り、気味が悪いと思っていると、トイレの中で鍵がかかり、閉じ込められ、赤ん坊の泣き声などがしたそうだ。そのトイレは汲み取り式だから、そこに赤ん坊を捨てたという伝説があるそうだ。その先生は朝まで閉じ込められていたという。(小1の頃、父)
- 21三浦にグリーンスクールに行ったとき、若い先生が話していた話。僕たちの泊まった部屋はトイレにとっても近いところで、電気がないのです。そして、その若い先生の先輩が見回りをしていると、トイレから女の人の泣き声が聞こえてくるのです。行ってみると、何もありません。そして、もう一度行くと、首から上だけが血を流して飛んでいたそうです。そして、その先輩は気が狂って精神病院にいるそうです。(小6の時、若い先生)
- 22夜、廊下のつきあたりに便所に、ある人が入っていった。用をたしてドアを開けようとしたが、開かない。その人が帰って来ないことを不思議に思った彼の友人が、便所に入って行ったが、その人はいなく、彼の友人も閉じ込められてしまった。(小学校の移動教室で、先生)
- 23小学校のころ、修学旅行で京都へ行き、そして、Xホテルに泊まった。毎年ぼくの小学校の生徒が行くと、ある部屋の、赤い人の顔の額縁から煙が出て、外へ行ってしまうということ。ぼくが行った年はそれが一回と、だれもいないのにノックされるということがあった。そのホテルは前は死体置場だったという。(小6の時、ぼく自身の体験)
- 24日光の何とかという坂の話。ある学校の修学旅行で、夕方、生徒が寺の墓地で鬼ごっこをしていた。そのうち一人が急に化け物に出会い、逃げようとした。あわてていたため、石につま

ずいて転んだ。そして化け物に殺された。それを知った先生も、翌日の夕方そこへ行ったら化け物が出て、死ななかったが、足をやられて骨が折れた。ほんとうの話らしい。(小6の時、小学校の先生)

25ある学校の四号館四階に、夜物音がする。ある日、一人の用務員が不気味に思い、そこに行った。そしたら、そこに男の人の幽霊がいた。びっくりして、すぐに校長先生などの先生を呼んで、また行ってみた。すると、そこに男の人の骨があった(小6の時、小学校の旅行で、友達)

26夜、忘れ物をして学校へ帰った少女が教室に行くと、一人の少女が「かくれんぼしよ」と言ってきたので、こわくてトイレに逃げ込むと、上から「見つけた」。(自分でもこわい)

27久しぶりに学校に朝早く出かけて、午前四時ぐらいについた少年が教室に行くと、親友の女の子がいました。少年はトイレに行くのが怖くて、親友に付いてきてもらい、外で待っててもらいました。用が済んで外に行ってもだれもいず、午前七時ぐらいに先生が来て、その親友は昨日トラックに引かれて死んだということがわかった。(自分でもこわい)

(参考文献) 常光徹「学校の世間話—中学生の妖怪伝承にみる異界的空間—」(『昔話伝説研究』, 1986年3月)

松谷みよ子『現代民話考 第二期 II 学校』(立風書房, 1987年)

K) 数え歌編

1いち、にる、さる、しし、ごりら、ろば、しちめんちょう、はち、くま、じゅうしちまつ(幼稚園の時、兄)

2いち、に、さんまる、しいたけ、でっこん、ぼっこん、ちゅうちゅう、まいまい、きゅうちゃん、ブー(小1の時)

3いち、にい、さんまる、しいたけ、でっこん、ぼっこん、ちゅう、ちゅう、たこ、かいな(不明)

4いち、にい、さんまの、しいたけ、でっこん、ぼっこん、ちゅうちゅう、がりがり、ミスター、ブー(小3の時、友達)

5いち、に、さんまの、しっぱ、ごりらの、ろっこつ、なっぱ、はっぱ、くさった、とうふ(幼稚園で弁当を食べる時、友達)(幼稚園の頃、近所の友達)

6いち、に、さんまの、しっぱ、ごりらの、むすめ、なっぱ、はっぱ、くさった、とうふ(小学校で)

7いち、に、さんまの、しいたけ、ごりらの、むすめ、なっぱ、はっぱ、くさった、とうふ(幼稚園の時、友達)

8いっちゃんちの、にいちゃんが、さんちゃんちで、しっこして、ごめんもいわずにいっちゃった(えかき歌)

- 9 いっちゃんちの、にいちゃんが、さんちゃんちで、しっこして、ごめんもいわない、ろくでなし……（忘れた）……（幼稚園の時、近所の子）
- 10 いっちゃんちの、にいちゃんが、さんちゃんちで、しっこして、ごめんもいわずににげてった、ろくちゃんちの、ななちゃんが、はっちゃんちで、くり（栗）もろて、と（戸）もしめずにかえっちゃった（母）
- 11 いっちゃんちの、にいちゃんが、さんちゃんちで、しっこして、ごめんもいわずに、ろくでなし、しちめんちょうに、はたかれて、くつもはかずに、かえっちゃった（4～5歳、友達と歌っていた）
- 12 一はヒサンな便所掃除、二は日本一の大ドロボウ、三はさくらのお姫さま、四は……（忘れた）……、五はゴリラのけつ洗い、……（以下忘れた）……（小学校の友達）
- 13 一は一日便所掃除、二はにわとりコケコッコ、三は魚が泳いでる、四は死人の……（忘れた）……、五はゴリラの背中洗い（小3の時、学校の友達）
- 14 一は一日遊んでる、二はにわとりコケコッコ、三は魚が泳いでる、四はしらがのおじいさん、五はゴリラのけつ洗い、六はやしきのろくろ首、七はりっぱな七面鳥、八ははげたおじいさん、九は……（以下忘れた）……（小学校の友達）
- 15 一つは二つはいいけれど、三つみにくいハゲがある、四つ横ちょうにハゲがある、五ついっぱいハゲがある、六つ向こうにハゲがある、七つななめにハゲがある、八つやっぱりハゲがある、九つここにもハゲがある、十でとうとうジャリッパゲ（小5の時、父）
- 16 一つは二つはいいけれど、三つ三日月ハゲがある、四つ横にもハゲがある、五ついっぱいハゲがある、六つ向こうにハゲがある、七つななめにハゲがある、八つやっぱりハゲがある、九つここにもハゲがある、十でとうとうツルッパゲ（中1になって、友達）
- 17 一つは二つはいいけれど、三つ三日月ハゲがある、四つ横にもハゲがある、五ついつもハゲがある、六つ向こうにハゲがある、七つななめにハゲがある、八つやっぱりハゲがある、九つここにもハゲがある、十でとうとうツルッパゲ（中1になって、友達）
- 18 一つ人にはハゲがいる。二つ二人はハゲがいる、三つ三日月ハゲがいる、四つ横にもハゲがいる、五ついつでもハゲがいる、六つ向こうにハゲがいる、七つななめにハゲがいる、八つやっぱりハゲがいる、九つここにもハゲがいる、十でとうとうツルッパゲ（小3の時、学校の友達）
- 19 一つ人にはハゲがある。二つ二人にハゲがある、三つみんなにハゲがある、四つ横にもハゲがある、五ついつでもハゲがある、六つ向こうにハゲがある、七つななめにハゲがある、八つやっぱりハゲがある、九つここにもハゲがある、十でとうとうツルッパゲ
- 20 一つひたいにハゲがある、二つ不思議にハゲがある、三つ三方ハゲがある、四つ横ちょにハゲがある、五ついつものハゲがある、六つ向こうにもハゲがある、七つなんでもハゲがある、八つやつれたハゲがある、九つここにもハゲがある、十でとうとうツルッパゲ（小学校の友

達)

21一番初めは一の宮、二は日光東照宮、三は佐倉の宗五郎、四は信濃の善光寺、五つ出雲の大社、六つ村々鎮守様、七つ成田のお不動さん、八つ八幡の八幡宮、九つ高野の弘法さん、十は東京日本橋（お手玉歌）（昔、愛知県で、母）

22一人でさびし、二人で参りましょう、見わたす限り、よめ菜にちょうちょ、いもうとの好きな、紫すみれ、菜の花咲いた、やさしいちょうちょ、九つ米や、十までまねく（小学校の時、姉、何をする時なのかわからない）

L) その他

1坊や良い子だ金出しな、父ちゃん母ちゃんに内緒だよ、いつかきつと返すから（まんが日本昔ばなしのかえ歌）（小5の時、学校で）

2おてテンブラ食い過ぎて、腹をこわして倒れた。おーや、もうだめだ。はいえん、ろくまく、しんけいつう。医者が行っても治らない。（お手々つないでのかえ歌）（5歳、母）

3もーもたろさん、きんたろうさん、もしもしかめよ、はとぼっぼ、りゅうぐうじょうでボチがなく、ワン（桃太郎のかえ歌）（小5の時、学校の友達）

4いにしえの昔の、武士のさむらいが、山の中の山中で、馬から落ちて落馬して、女の婦人に、見て眺められ、顔を赤らめ赤面し、家に帰って帰宅して、仏の前の仏前で、腹を切って切腹し、死んであの世に行っちゃった（本）

5ロシヤ ヤバンコク クロパトキン キンターマ マ?ロフ フンドシ シメタ タカジャッポ ポンヤーリ リクグンノ ノギサンガ ガイセンス スズメ メジロ ロシヤ

6あなた私のことをあんたあんたってよんでいるけれど、私あなたのことをあなたあなたってよんでいるんだから、あなたも私のことをあなたあなたってよんでよね、あなた（小2の頃、学校の友達）

7ABCの海岸でカニにちんぼこはさまれた、あいたたいたい、はなすもんかソーセージ、赤ちゃんぬってもなおらない、黒ちんぬったら毛が生えた（小学生の時）

8ある家にお父さんとお母さんと小さな男の子が楽しく住んでいた。しかし、赤ちゃんが生まれてから、お母さんは赤ちゃんばかりかわいがっていた。そのため男の子は赤ちゃんを殺せば自分がかわいがってもらえると考え、夜にお母さんの胸に毒をぬった。次の日の朝、部屋を見てみると、となりのおじさんが死んでいた。（小1～2の頃、親戚のおじさん）

9あるところに二人の子がいる家族があった。上の子は下の子に母親のオッパイをとられてしまったので、ふくしゅうのため母親のオッパイに毒をぬった。翌朝死んでいたのは父親だった。（本）

10おもしろい話。昔、ある所に、頭が白く、胴が白く、足も白く、尾も白い犬がいました。（本）

11おもしろい話、犬がいました。その犬は顔が白くて、足も白くて、胴も白くて、尾も白い犬が

いました。(小さい頃、おじ)

12性暦一年、アダムとイブがいたそう。……(自分で考えた)

13ある所にとってもうそつきな男がいた。そして死ぬ時宝のありかを言ったが、それもうそだった。

(小3の時、学校の先生)

14昔、仲のいい夫婦がいた。夫は結婚記念日のために大事な刃(刀?)を売って、妻のきれいな髪をとくためのくしを買った。妻は夫の刃(刀?)を置くためのおき物を大事な髪を売ったお金で買った。そして結婚記念日にそれを渡したけど、夫は刃(刀?)を持っていないし、妻は髪を切ってしまったので、その日二人は大げんかした。(小学校の友達)

15ある所に、狂ったじいさんがいました。毎日、家の屋根に登って「息子やー」と叫ぶそうだった。ある日、一人の青年がそのじいさんのところへ来た。じいさんは「空き巣だ」と言って、家へ入れない。青年は「俺が息子だ」と何度もくりかえした。しかし、じいさんは空き巣と思いこみ、屋根の上に乗って「空き巣がいる」と叫んだ。ところが、村の人は「あのじいさん狂っているからかまうな」と言って、相手にしない。青年はずっと「息子だ」と言い、じいさんはいつまでも「空き巣だ」と叫びつづけたという。(幼稚園の時、親)

16ある場所に平家の逃げのびた武士たちの子孫の住む部落がある。そこはきょうだい同士で結婚する規則があって、そこには口さけ女が生まれたそうである。(小6の時、宿で、野球のコーチ)

17ある団地を立てる時に、雷にうたれ、一人の男がまっさかさまに落ちた。雨の降る日だったので、その男は地面にうまってしまった。しかし、いくらさがしても、その男の右腕は見つからなかった。それから団地で「痛い痛い」と声をするそうである。(小6の時、宿で、野球のコーチ)

18橋に女の人がいて、怪我をしていたので、おぶっていったら、その人が急に重くなったので顔を見てみると、口さけ女だった。(小1～2の時、友達)

19夜、道を歩いていたら、のっぺらぼうに会ったので、近くのラーメン屋に逃げて、そのことを話したら、その人は「実は」と言って顔を手でなでると、その人はのっぺらぼうになった。

(ムジナ)(小1～2の時、先生)

20ある時、東名高速をバイクで飛ばす二人がいた。その二人があるトンネルを通り過ぎたところ、後ろの一人の首が飛んでいた。そのトンネルには夜中幽霊が出るという。(小5の時、学校の先生)

21昔々、今のように火葬ではなく土葬だったころ、骨をうめたあと土をもり上げた。すると、数か月後、夜ドスンという音がする。朝行ってみると、土の山があった場所が普通の地面にもどっているのがあった。(小学校の担任)

22ある日、Mは友達四人でドライブに行った。その帰り、車は気味の悪い岩肌がむきだしのトンネルにさしかかった。車を運転していたMは自分の方にもすごい速さのオートバイが向か

ってくるのが見えた。バックミラーにうつるオートバイは二人乗りをしており、見えた男の顔は青白く様子がおかしかった。四人は寒気を覚え、スピードをあげたそのとたん、すれちがったオートバイの後ろに乗っている女の顔を見ることができた。顔は無残にもみけんを横切るように割れ、中身が見えていた。翌日、警察に問い合わせると、数日前にオートバイが壁にぶつかり、二人連れの男子（男女カ）亡くなっていた。（小6の時、塾の先生）

（５）授業終了後のアンケート調査

1988年12月5日、119名に対して伝承文学と伝承文学の授業について匿名のアンケート調査を行った。その内容と結果は次の通りであった。アンケートの結果は記述式の中で文意の通らないもの以外はすべて載せておいた。

A) アンケート内容と結果 I

1) 伝承文学についてどう思いますか。

- ・おもしろい 56% (67名)
- ・つまらない 3% (3名)
- ・どちらとも言えない 41% (49名)

2) 伝承文学が伝えられる環境についてどう思いますか。

- ・良い 18% (21名)
- ・悪い 35% (42名)
- ・どちらとも言えない 47% (56名)

3) 自分の伝承文学の知識についてどう思いますか。

- ・ある 11% (13名)
- ・ない 42% (50名)
- ・どちらとも言えない 47% (56名)

4) 伝承文学の授業についてどう思いましたか。

- ・おもしろかった 51% (61名)
- ・つまらなかった 8% (9名)
- ・どちらとも言えない 41% (49名)

5) 伝承文学の授業内容についてどう思いましたか。

- ・むずかしかった 25% (30名)
- ・やさしかった 16% (19名)
- ・どちらとも言えない 59% (72名)

6) 伝承文学の授業で新しく知ったことがありますか。

- ・ある 84% (100名)

- ない 4% (5名)
- どちらとも言えない 12% (14名)

7) 伝承文学の授業は国語の力をつけるために意義があると思いますか。

- ある 56% (66名)
- ない 9% (11名)
- どちらとも言えない 35% (42名)

8) 伝承文学の授業は自分(たち)を見つめるうえで意義があると思いますか。

- ある 34% (40名)
- ない 20% (24名)
- どちらとも言えない 46% (55名)

B) アンケートの内容と結果Ⅱ

9) 伝承文学について何か感想があれば書いてください。

- 伝承文学は今後ずっと伝承し続けてほしいと思う。(2名)
- おもしろいからこれからもずっと語り伝えられたらいい。
- もっといろいろなことを伝承していった方がいい。
- ああいう話をなぜぼくの時に語りつがないのか不思議に思う。
- 人々の話題として伝承文学はよいと思う。
- 長い年月がたつにつれておもしろい話が出てきている。
- おもしろいと思った。
- 掛詞など頭を使うものがおもしろかった。
- とてもおもしろいものばかりで、ワンパターンでおもしろかった。
- 一つの話がいろいろな地域などによっていろいろ変わってくるのがおもしろかった。
- 同じものがあれほど広く伝わっているのには驚いた。
- おもしろいものもつまらないものもあった。
- いろいろな人がいろいろな話を知っているんだなと思った。(2名)
- ぼくはあまり知らなかった。
- 伝承文学は小学校でやるような程度のものから大人まで楽しめるものもある。そして、その伝承の文句を知っていると、けっこうおもしろいものがある。
- 伝承の意義とは、やはり昔の文化の伝承と現代の文化の欠点、問題点の鋭い指摘であり、そういう意味でなかなか重要だと思う。
- ぼくは民話や説話が好きなので、伝承文学は楽しい。
- 伝承文学は子供の時から知っているので、おもしろい。
- 小さい頃に聞いた話には怖いものが多かったが、わらい話が多いのには驚いた。

- たくさん知るの楽しい。
- 伝承文学は人の心を豊かにするあたたかみのようなものがあり、昔の人の心が表れている。
- よく考えたものだ。
- こわい話などは伝承文学と言えるのだろうか。
- なぞなぞや話は知っているようで思い出せないものが多い。
- 伝承文学（例えば民話）の伝えられ方について興味がわいた。
- その時代が反映していて楽しいと思う。
- 伝承の文学は多くの人によって大成されたもので、フィクションであるが、それでも当時の様子や人の考えがわかるような気がする。
- 伝承文学は民族などの中で語り続けられてきたものなので、すぐれたものが多いと思った。
- 伝承されるものはその人たちにとって必要なことであるし、伝承されないものもしょうがないと思う。その時代のニーズに合ったものが受け継がれる。
- いろいろなおもしろいことがあり、わかりよいと思う。
- 早口言葉などおもしろいものがあり、意外と面白いものだなあと考えた。
- 日本の伝承文学は素朴で暗い感じがするが、やってみると実に奥深いものがある。
- 現代では、伝承文学はあまり気のつかない流行とも思えるような感じで伝わっていると思った。
- 今言葉が意志の伝達の道具としか使われていない傾向があるが、言葉はもっと人間の中に入り込んでいいと思う。
- いろいろな人の考え方（昔の人の考え方）がわかりとてもいいものだが、現在あまり聞かれなくなっていると思う。
- 小さい子供の頃の運動にちょうどいいのではないかなと思う。
- 僕らはほとんど伝承文学を知らない。そういうものを伝承文学と呼ぶのか……。
- くだらない。人をばかにさせるようなものだ。なくすべきだ。
- 伝承していくのは大切だが、そこから新しいものを創造していったらいいと思う。
- 時間とは過去・現在・未来と続き、またそれにつれて人も流れている。したがって未来への意義はある。
- 伝承文学の9割は新しくできては消え、できては消え……というものではないか。
- 伝承があってこそ文化は生きるのだと思う。
- もっとHなことを伝承していった方がいい。
- 昔の人々が楽しむために作ったものだろうから、今の人々でも楽しめるものなのではないかなと思う。
- なぞなぞや早口言葉には意味はないものだとおもっていたけれども、とても重大な意味があるので驚いた。
- 世界各地の文化の伝承が潮の流れ、自然の力によって大きく左右されることがわかった。

- 昔の人はどこから早口言葉やなぞなぞを思いついたのだろうか。
- 古風な遊びが減り、近代的な遊び（コンピュータゲーム）が増えてきた時代に、過去を見直すような文化の伝承はすばらしいと思う。
- 人間の文化を知るには一番てっとり早い文学だと思う。
- 昔の人々はなぞなぞなどの面から言葉の扱い方が上手だったということが言える。今の自分たちではわからないものも多い。
- 初めて聞く話などはおもしろいが、二度目になるとおもしろくなる。
- 伝承文学の作品は一瞬何かわからないけれど、読むとすぐ理解できる。
- エッチな話のアンケートを取った覚えがえるが、どこへ行ったのだろうか。

C) アンケート内容と結果Ⅲ

10) 伝承文学の授業について感想があれば書いてください。

- 今まで知らなかったものがあつたので、それを吸収できてよかった。
- なぞなぞなど身近な遊びや昔話などが長い年月を経て伝わっていることがわかった。
- むずかしかった。(6名)
- おもしろかった。楽しかった。(13名)
- はっきり言って楽しい。興味がわく。
- 普通の授業よりかなりおもしろかった。(4名)
- 早口言葉やなぞなぞなどけっこうおもしろいものがあってよかった。(2名)
- いろいろな話やなぞなぞなどがわかって楽しかった。
- よかったと思う。(2名)
- この課題はむずかしいと思っていたが、すごくおもしろかった。
- とても楽しかったが、むずかしかった。
- おもしろくなかった。
- おもしろい時もつまらない時もあった。
- いろいろな話がよくわかった。(4名)
- なぞなぞや昔話、早口言葉などいろいろ身近なものを取り上げてくれたので、わかりやすかった。
- よいと思うが、現代の伝承を入れると日本独特と言えるものがなくなってしまった。やるなら昔からのものだけで……。
- 伝承文学のよさを改めて感じた。
- 回文がたくさん出てきてとてもよかった。
- 今回は東京・神奈川地方の伝承文学を勉強しただけなので、まだ伝承文学そのものをあまりわかっていないような気がする。

- このようなものが一体何に役立つのかわからなかった。
- 外国の話も聞きたい。
- 昔からの伝承をもっとたくさん紹介してほしかった。
- 授業は一見国語には関係がないかのように思われるが、大いに意味があると思う。
- あまりぼくはそういうものを知らなかったので、残念。そういう意味でもう少し参加したかった。
- 知らないことがたくさんあった。
- 授業でHな話を取り上げるのにはびっくりした。
- もっと時間を増やしてみてもいいですか。(2名)
- もっとたくさんやりたかった。
- やるのはよいと思うが、もう少し授業時間を短くするべきだ。
- うーんと時間を短くしてほしい。長時間やっていると、注意力がさんまんになる。
- 授業はあまりおもしろくなかった。
- アンケート方式はいいと思う。(2名)
- みんなの話を集めたのがおもしろかった。
- アンケートの結果におもしろいのがあった。(2名)
- なぞなぞや回文を扱ったアンケートはおもしろかった。
- もっと文化の伝承について深く歴史を追求してほしかった。
- この授業で文化とは何かということがわかった。
- なぞなぞの「ナーンゾ」がおもしろかった。
- けっこう「あっ」と思わせるようなことがあって、とてもおもしろかった。
- 昔の文化を知ることによって、未来の生活を見つめていく上で意義があるのではないと思う。
- 自分の知っているなぞなぞやそれを知るきっかけについて深く掘り下げたので、よいと思う。
- なぞなぞの授業がおもしろかった。むかしと今はなぞなぞの形が違うことを初めて知った。
- 授業が抽象的過ぎてよくわからないことがある。
- 気楽に楽しむという感じを受けた。
- あまりよいものとは思えなかった。
- もう少し具体例を出してほしかった。
- 有意義であり、他の例などあってよかったと思う。
- 伝承文学には印象がないので、よくわからない。
- むずかしかった。どうしても意味の取れないものがいくつもあった。
- なぞなぞがよくわからなかった。なぞなぞとはおもしろいものだ。
- 時間がつぶれるだけだ。
- 日本人という民族を知る上で役に立つと思う。

- ・なぜなぞやこわい話の時は楽しかった。
- ・伝承文学を授業にやるのは、昔の子供になった気分になり、昔のことがわかり、今との比較ができるからよい。
- ・伝承文学はほとんど知らなかったが、かなりよくわった。
- ・昔話などを考える上で、どのように調べたらよいかもっと教えてほしかった。
- ・全体的にふんいきがよかったと思う。それに私はこういうものがおもしろいと思っているので、とても興味のある話が多かった。

(6) おわりに

これまで長々と述べてきた伝承文学資料集に対して、たわいもない言葉遊びや単純な一口話ばかりで、それらは文学と呼ぶに値しないのではないかという批判があるろう。文学の質に対する評価はもちろんあっていいが、ここまでは文学でここからは文学ではないというような判断（強く言えば差別）が果たしてできるのだろうか。そのようにして文学の領域をせばめてしまうことは、関連諸科学が進展する中で文学や文学研究が非常に停滞している原因になっていると思われるのではない。ここに示されたような伝承文学が生徒たちの中に今までかけがえのないものとしてあった事実を直視する必要があると思う。

また、本で読んだものやテレビで見たもの、ラジオで聞いたものなどは伝承文学とは言えないのではないかという批判も予想される。しかし、伝承文学を文字の文化と切りはなして純粹培養された口頭伝承としてのみとらえることができるのかどうかは疑問である。それがむずかしいことはわれわれの先祖が文字を持って以来のことであつたし、ましてや現代においては、情報化社会との関連をぬきにした伝承文学などほとんど考えがたい。言わば身体は伝承を発生させる装置として存在しているのだから、身体をぐりぬけてなされる口頭伝承を広く伝承文学と見ることに支障はなからう。

さらには、このような子供だましの歌や語りについて考えることは、いったい国語科の授業の中で国語の力を身につけさせていくために意義があるのかどうかという疑問もあるろう。しかし、それはあくまで大人の立場に立った考え方であり、子供たちを一刻もはやく大人にしたいと願う考え方ではないか。ましてや受験のための学習などという視点にたったならば、伝承文学などはおそらく真っ先に否定されるべきものにちがいない。しかし、受験のための学習がすっぱりと落としてしまうものの中に、言語を習得したり、言語生活を豊かにしたりするのためにかけがえのないものがあるはずである。伝承文学は枯渇しがちな教室の中におもしろさを取り入れながら、そうしたことを教えることのできる格好の教材であると思う。

a) 伝承文学の伝承状況について

この資料集の示す個々の研究史的な意義についてはここで論じる余裕もないので、くわしくは

機会を改めて述べることにするが、気のついた特色や問題点を各編に関して簡単に指摘しておきたい。

①A) 早口言葉編について

25～30, 44～48, 49～56, 65～69, 70～77などは同一の伝承と考えられる範囲内でさまざまなバリエーションを生みだしている例である。特に70～77の中には「坊主の絵」の部分が「ジョーズの絵」となっているものがかなり見られたことが注意される。11～16は伝承としては別のものであるが、同じ表現方法によったバリエーションの例である。この種類の伝承はさらに増える可能性が高いと思われる。22は『宇治拾遺物語』にあるもので、早口言葉とはやや性格を異にするが、学校教育の中で与えられた典型的な例である。

②B) さかさ語り編について

ありえない事柄（一種のことわざと考えられる）を連ねた滑稽な語りであるが、内容的な一致はもちろんのこと、すべてが「昔、昔」「昔々」で始まる語りの形式を持つことや七五調の調子が語りの基本にあることなどが共通している。10は本で覚えたものであって異なるが、1の姉以外はすべて小学校の時に友達から聞き覚えているから、子供たちの間で広く行われている語りであることが知られる。本で覚えた10の語りはほかと違うことも注意される。この種の伝承は古くは下級の宗教芸能者たちが持ち伝えた伝承であったが、それを子供たちが換骨奪胎しながら現代にまで伝えてきた貴重な例と言えよう。

③C) くさりの歌編について

下線を付した部分で次の内容に変化させる歌を、しり取り歌と区別してくさり歌と呼んでおいた。1～13はすべて「インドの山奥で」で始まるが、ほかに14・15, 16・17, 18・19のようなバリエーションがある。これは1・4にコマーシャルで覚えたとする例があるので、コマーシャルが伝承の原点になっている可能性が高いと思われるが、これだけ多様な変化を持っていることをみれば、もはや口頭伝承として完全に自立していることを認めざるをえない。小学校の友達から聞き覚えている例が多いところをみると、小学校の子供たちの間で伝承の生成が行われたことが想像される。

④D) 悪口言葉編について

言葉の機能から悪口言葉としたが、単なる言葉遊びの意識で語られたものも含まれているかと思われる。中でも15～22はしり取りの表現をとっているので、しり取り歌に分類することもできる。これらは「でぶでぶ百貫でぶ」「さよなら三角」「丸三角四角」で始まり、「光るはおやじのはげ頭」などで終わる語りの形式を持ちながら、その中の連想は語りの自由領域と言ってもよいほどに自在な変化を示している。そうした中で、20の父からの伝承がやはり古風な伝承として浮き上がってくるだろう。そして、この種の語りを楽しみながら習得したのはほぼ小学校低学年の頃に限定できそうである。

⑤E) ジャンケン言葉編について

ジャンケン言葉はあまりあがってきていないが、それは私の方で特に求めなかったこともおそらく大きく左右しているにちがいない。ジャンケンは子供たちの遊びの中で順序や役割などを決めていく際の最もポピュラーな方法であり、さまざまな場面でよく耳にするので、注意して集めればかなり集められると思う。資料集としてはまったく体裁をなしていないが、そうしたことが予想されるので載せておいた。具体的な動作やルールを明確にできるような記録になるように心がけておきたい伝承文学の一つである。

⑥F) なぞなぞ編について

なぞなぞは小学校の友達から覚えたものもあるが、本やテレビから知識として覚えた場合がかなり目につく。なかでも三段式のなぞなぞの場合は小学校の友達から伝え聞いたという例は一つもなく、本・テレビ・先生から学んでいる。これは三段式のなぞなぞは芸人などの世界で発達したものであると言われていることと無関係ではあるまい。二段式のなぞなぞは子供の世界のもので、三段式のなぞなぞは大人の世界のものであるという違いが現在でもあるらしい。生徒たちのアンケートの中には問題やクイズを書いてきたものがかかなりあったが、それらは載せなかった。しかし、それでもなおクイズとなぞなぞとはすっきりと区別しきれない面があるという問題点が残された。

⑦G) 回文編について

回文も早口言葉とともに予想以上に集まったが、小学校の友達から伝え聞いたものばかりでなく、おもしろい知識としてかなり本から学んでいることがわかった。その中に、わずかではあるが、16・21・27・39・40のよに自分で考えた意識しているものがあることが目につく。状況から考えてすでにあるものであった可能性の高いものもあるが、そのように意識されていることに注意しておく必要がある。それは著作権などとは無縁な伝承文学の本質をよく示しているし、回文が今後も新たに生成され続けるであろうことを予想させる。

⑧H) 「おえまだ」で終わる話編について

話の内容としては必ずしも一致しないものがあるが、「おえまだ」という指摘で終わる話であるという点で一つにまとめた。世間話の一つの話型として認定することができるのではないかと考えている。伝統的には「こんな晩」という世間話があり、一つの話型として本格昔話として認定する説もあるが、この話もその一つのバリエーションと考えることもできそうである。すべての話が口頭伝承であり、小学校の中学年以降に聞き伝えている点でも共通するが、特に1・2では小学校の先生が語り手になっている。ほかの編にも見られたが、タテの伝承に先生が果たしている役割は無視できない。

⑨I) こわくておもしろい話編について

前半の1～4, 5～8, 10～11, 12～13は生徒たちの中では極めてポピュラーの小話であるらしい。そのバリエーションとして14, 15, 16, 17, 18がある。これらはみな同音あるいは類音異義語を利用して、こわさからおもしろさに転じる話である。また、後半の21～24のタクシーの話、

25・26のシューマイの話はほとんどすべて本からとったものであるが、これらの話が複数の者から出てきているし、話のまとまりもあるので、これから口頭伝承へ生きのびていく可能性が予想されるため載せておいた。これらについては今後の調査を待たなければならない。

⑩J) 学校に関わる話編について

学校に関わる話も予想されたように数多く集められた。学校は生徒たちの生活空間であるが、昼と夜ではその様子が一変するし、理科室・音楽室・図書室・体育館そしてトイレなどは不気味な空間として意識されている。しかもそれを本で読んだり、小学校の友達などから伝え聞いたりしたほかに、自分の学校の噂であったり、自分自身の体験であったりすることによって、子供たちの間ではかなり信じられているのである。話の信憑性について考えることのできる話群であるが、この種の話は学校教育の場での扱い方は非常にむずかしい面があると思われる。扱う場合には、話としての話型を備えているものもあるので、まずは事実から切りはなして扱うことが肝要であるように思う。

⑪K) 数え歌編について

数え歌としたものでは、1～7、9～11、12～14、15～20をそれぞれ同一の伝承と見ることができる。そのうち1～7、9～11は幼稚園の時期に、12～14、15～20は小学校の時期を中心に行っているの、伝え聞いた時期にズレがあるらしい。一から十までを数えていくので、きわだった違いはでていないが、その形式を越えない範囲でやはり変化をみせている。21・22は地方によく伝えられている伝統的な数え歌であり、母・姉という家族内の伝承になっている。核家族世代では祖母から伝承文学を教えられることは極めてまれで、この母と姉はほかの編でも伝承文学の教授者として重要な役割を果たしていた。ほかの編にも父・兄というのが見られないわけではないが、家庭内では主に女性の系統をとおして伝承文学が習得されているのではないと思われる。

⑫L) その他について

ここには一つの編として立てることはしなかったが、さらに伝承の広がりや推測されるものや伝承文学について考えるうえで貴重であると判断されるものを載せておいた。1～3はかえ歌、4は同じ意味をくりかえしながら仕立てられた語り、5はしり取り歌、6と早口言葉と悪口言葉を兼ね備えたような語り、7～22はさまざまな種類の話からなる。なかでも8・9、10・11は同一の話型の話であるが、ともに本を読んで覚えたものと親戚の人から聞いて覚えたものとが平行してある典型的な例である。アンケートには多くの「口裂け女」の話や怪談が含まれていたが、別の機会にゆずるとしてここでは割愛した。

B) 伝承文学の授業を振り返って

①アンケート調査の方法について

アンケート調査は短時間に多くの生徒からさまざまな伝承文学を聞き集めることができるという利点があるが、その際に注意しておかなければならない問題がいくつかあるように思う。まず、

伝承文学は本来口頭伝承の声として存在し、なかには動作や音楽をとまなうものもあるが、アンケート用紙に書くという行為はそうした極めて重要な要素を落としてしまう。また、書くことによって整理されてしまうところがでてきたり、書き誤りをしたりとういような、語ったり歌ったりした場合にはあまり問題にならないことが問題になってくる。さらには、フィールドワーク調査のように一人一人と向かいあって話すことがないので、伝承文学を支えてきた背景や意識をなかなかとらえにくい。しかし、そうしたさまざまな問題を十分考えたうえで行えば、きわめて有効な方法になろう。また、アンケート調査を行う場合、こちらの必要とする要素がもれなく書かれるようにするため、あらかじめ所定のアンケート用紙を作成して一つずつ別々に書かせた方が整理の時に便利であろう。

②教材編成化の問題について

今回はアンケート調査の結果についてほとんど予測が立たなかったために、5回のアンケートにしても、それをもとにした5回の授業にしても、その場の流れの中で生徒たちにとって最も問題であり、学習する意義があると判断されたものを扱ってきた。それは非常に新鮮なかたちで伝承文学を考えることができる機会になったが、悪く言えば行き当たりばったりのアンケートであり、授業であった面も否定できない。今後は本稿の伝承文学資料集などをもとに、予想される伝承文学と授業者の教育意図とを明確にした計画的な授業を組み立てていく必要があろう。また、今回は「文化論」の中でも、文化の伝承がいかになされる得るかという大きな問題設定のなかで、ごく身近な伝承文学に限定して扱った。伝承文学論を「言語論」「表現論」「詩論」などの中で展開することも可能であろうが、中1を対象とした授業の中ではややむずかしいのではないかと考えた。伝承文学は国語科全体のカリキュラムの中でどのように位置づけることができるのかという構想をしっかりと立てていく必要があろう。

③生徒の意識について

生徒たちの意識について調査したアンケートにもとづいて気のついたことを記してみる。

- (a) 選択式のアンケートの場合、(6)を除いてどちらとも言えないとする比率がかなり高い。
- (b) 伝承文学や伝承文学の授業をおもしろいと思っている生徒が半数ほどいる。それは具体的な感想にもよく示されている。
- (c) 伝承文学が伝えられる環境について、必ずしも悪いとばかりは思っていない。しかし、自分の伝承文学の知識となると4割ほどがないと感じている。
- (d) 伝承文学の授業はやさしくもむずかしくもなかったが、新しく知ったこともあるので、伝承文学は国語の力をつけるのに役立つと考えている生徒が6割近くいる。
- (e) 伝承文学の授業が自分（たち）を見つめるうえで意義があると考えている生徒としない生徒が対立するようにしてある。

生徒たちがこの試みについて好意的に考え、協力してくれたという感じは強いが、授業後のアンケートの項目についてもさらに検討をしなければならないし、授業の効果や意義を知るために

授業前のアンケート調査を実施してみるのも一つの方法かもしれない。

C) 国語科教育における伝承文学の位置づけについて

伝承文学教育を国語科教育の中にどのような意義をもってどのように位置づけることができるかということについて、現在考えていることを6つほど挙げてみる。これらについては、今後検討を重ねて具体的に理論化していきたいと考えている。

①言語教育に

言語が情報伝達の道具という傾向を強めている現在、そうしたものからはすっぽりと落ちてしまう面を伝承文学は持っている。それは一言で言ってしまうと言語の遊戯性ということになる。言語の遊戯性などというのは、極めて前近代的なもの、幼児的なもののように入れられ、表だつた論理的な世界では否定されるものである。しかし、われわれが日常の私的な世界で言語、特に口頭言語の持つ力を実感させられるのは、時にはことわざであったり、時にはダジャレであったりして、それらは伝承文学であったり、伝承文学に依拠したものであることが多い。くだらないとされている言語の遊戯性の重要性を教えるために、伝承文学は欠かすことのできない教材であると言えよう。

②詩的表現のための教育に

近代短歌や近代俳句、そして近代詩は伝承文学に示されたような表現を前近代的なものであるから否定しなければいけないと考えてきた。そうした考え方は文学者のみならず広く社会に浸透して、一人の人間の人生史の中ではそれらは幼児的であるという理由で克服されなければならないものであった。そうしたことを助長してきたのは、家庭教育であり学校教育ではなかったかと思う。しかし、こうした伝承文学の表現の中から新たに詩的表現が生みだされる可能性があるのではないかと思われてならない。教室の中で詩的表現の伝統を教えることも大切だが、それがかえって生徒たちの持つ詩的表現の創造性を枯渇させかねない面があるように感じる。そうならないためにも、彼らの持つ伝承文学の素養を重視したいものである。

③話し言葉の教育に

伝承文学について考える際に、小・中学生の頃というのは非常におもしろくしかも大切な時期である。昔話の優れた語り手たちの中にはこの時期に同じ年頃の友達と昔話を語りあった経験を持っている者が多いことが証明されている。また、現代では、「口裂け女」の話に代表されるような世間話や噂話の語り手たちがこの時期の子供たちであるとも言われている。そうした点から、時代による違いはあるにしても、この時期の子供たちが伝承文学の発生や伝承に深く関与していることはほぼ明らかである。今日の話し言葉の教育では自分の生活体験や気持ちを話すことなどが重んじられているようであるが、人から聞いた話を伝えることとか、作り話をするとか、本で読んだことを話すとか、もっと伝承文学を考慮してもよいと思われる。その際にストーリーテリングの理論などから学ぶ必要がでてこよう。

④古典文学の理解のための教育に

伝承文学は伝えられる時代を生きぬくためにさまざまに表現を変えているが、時代を越えて生き残された表現も数多く見出すことができる。近代文学が切り捨てた掛詞の方法や五七調・七七調など調子が表現の中に濃厚に残されている。また、狂言や戯作文学などに通じる滑稽な精神性なども見ることができる。古典文学の時代においても、多くの場合、伝承文学は文字に記される正統的な文学に自立するためには否定されるものであったという事情は、近代文学の場合と共通するにちがいない。しかし、伝承文学が書かれた文学の成立のために多大なエネルギーを与えてきたことも否定できない事実である。そうしたことを考えながら、古典文学の教育の、特に入門期の指導に役立てることができるのではないかと考えている。

⑤中等教育の中で位置づけ

伝承文学を小学校ではなく、わざわざ中学校で改めて扱う意義を明確にしておく必要がある。それは生徒たちが自分たちの蓄積してきた伝承文学を表現し、それをいつとも知れない歴史的展開の中で客観的にとらえる視点を持つことができる年齢である点にあると考えている。小学校段階では「いつとも知れない歴史的展開の中で客観的にとらえる視点を持つ」ことがむずかしいだろう。また、高等学校段階では多くをもう忘れてしまっていて、「自分たちの蓄積してきた伝承文学を表現」することがむずかしいようである。しっかりした調査をしたうえで結論は出さなければならないが、発達段階から考えて、中学校の、しかも1～2年がそのために最も適当な時期はないかと思われる。

⑥関連諸教科との連携

伝承は文学としてだけであるのではなく、人間の身体行為の総体としある。国語科としてはその言語的側面を主に扱えばよいわけであるが、広く伝承教育ということでは関連諸教科との連携を考える必要がある。例えば、歌であれば音楽と関わりが深いことは言うまでもないし、伝説であれば社会科との関わり、絵かき歌なら美術との関わり、動作を伴うものなら体育との関わりなどが考えられていい。具体的にどのような形で授業の展開が可能なのかまだ想像できないが、新しい境界領域の研究がひらけてくる可能性もあるのではないかと思われる。個々の専門領域での教科教育が大切なことはこれもまた言うまでもないが、総合的な伝承文学の教育は、今一番必要とされる全人的な人間の形成に寄与できる点が大いにあるにちがいない。